

海外英語研修の効果と条件：九州大学のケンブリッジ大学英語研修

鈴木，右文
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門：准教授：英語学

<https://doi.org/10.15017/13964>

出版情報：言語文化論究. 24, pp.19-27, 2009-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

海外英語研修の効果と条件

——九州大学のケンブリッジ大学英語研修——

鈴木 右 文

1. はじめに

筆者は、九州大学の学生を対象に、ケンブリッジ大学英語研修（2009年度実施分からはケンブリッジ大学英語・学術研修と改称）を企画実施しているが、九州大学大学院言語文化研究院は中期計画を受けた平成20年度の計画番号27に「夏季、春季休暇を活用したイギリス、ドイツでの語学研修・異文化理解研修を継続実施するとともに、その教育成果の検証・評価を行う。（以下略）」と謳っており、そのとりまとめの意味を兼ね、本稿では、これまであまり発表してこなかった研修の効果について考察し、そこから海外語学研修の満たすべき条件のいくつかをあぶり出して指摘する。あらかじめはっきりさせておきたい結論は、事前研修と現地研修あわせて9ヶ月にわたる研修を経て、国際検定試験のスコア上昇効果のような量的変化も見られるが、参加者たちが感じる質的満足感が極めて高いことが特筆に値するということである。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第2節でこの研修の概要を述べ、第3節においてTOEFL-ITPのスコア変移を検討する。第4節では参加者から帰国後提出されたレポートの引用も交えながら、研修のプラスの側面を掘り起こす。第5節は結辞である。

2. ケンブリッジ大学英語研修の概要

この研修は九州大学や言語文化研究院の公式行事ではない。2000年10月に当時の言語文化部（現在の言語文化研究院）と受入先であるケンブリッジ大学ペンブローックカレッジが学術交流協定を締結したが、学生交流の条項はなく、世話教員が企画実施するものである。しかし、募集にあたって英語教員や全学教育広報誌の協力を得たり、事後単位認定の申請をしたり、研修のHPへ国際交流課のHPからリンクがはってあるなど、大学との係わりもあり、言語文化研究院の中期計画でも言及されるに至っている。1996年に九州大学教授（現福岡女学院大学教授・九州大学名誉教授）の廣田稔氏が創始したもので、1999年度から筆者が加わり、廣田教授の退職後は筆者が企画運営を担当し、2008年度には第13回を迎えている。ケンブリッジ大学では自身の直接運営により英語研修を引き受け実施してきたカレッジはほぼペンブローックカレッジだけで希少価値があるのだが（2008年からはダウニングカレッジがペンブローックからノウハウを得て開始した）、そこに参加している日本からの大学は早稲田、日大、明治、東京女子、成蹊など大学の公式行事として参加する私立大学ばかりであるのに対し、国立大学は九州大学だけで、大学の公式行事ではないながらも、ますます貴重な機会を提供しているものと言えよう。

2. 1 参加者募集から参加者決定まで

現地研修は前期定期本試験後の出発で、帰国は9月に入ってしまうという日程（2008年の場合は8

月7日出発、9月2日帰国)だが、参加申込は前年の5月から11月までである。これには理由がある。九州大学以外は大学の公式行事としてペンブローックカレッジでの研修を実施しているため、大学の責任において契約を結んだ後に参加者を募ることができるので1年生でも参加可能なのだが、九州大学の場合は筆者個人の責任で企画実施しているため、現地研修実施前年11月までに最低催行人員を確保できなければ契約を取り交わすことができず、1年生は参加できない。しかしそのかわり、他校にない長期の事前研修を学内で実施する余裕ができる。

募集の際は、1年生前期英語Ⅰの授業担当者にお願ひし、5月頃1年生全員にチラシを配布してもらう。そこには詳細な情報の掲載された研修のホームページのURLが掲載されており (<http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~yubun/cambridge.html>)、そこに申込方法を含めた一切が示されている。申込みにあたっては5～11月に一人あたり30分の面接を受けてもらい、11月中に、面接、申込書類、1学年次に1年生全員に実施している英語標準化テスト (TOEFL-ITP) のスコア、大学の成績通知書から合格者を判定する。2008年夏に現地研修を迎えた参加者は34名で、学部別では文学部4名、教育学部1名、法学部9名、経済学部3名、理学部2名、医学部1名、歯学部1名、薬学部2名、工学部7名、芸術工学部1名、農学部3名、学年別では2年生27名、3年生7名であった。2009年は23名の九大生が参加の予定である。

2. 2 事前研修

事前研修では、12月、4月、6月、出発直前の4回にわたって学習連絡会を実施する。内容としては、英語学習の指導、英国文化に関する学習の指導、英国に関する調査発表、週末旅行の準備の指導、前年の参加者による講話などからなる。この他英語学習や旅行準備について計画書や進捗状況報告書を提出してもらっての指導もメール等で個別に行っている。また、事前研修期間を通じて1冊教科書を持たせ、要約の提出と添削指導を実施するなど、講読の訓練も行う。2008年度は、現地研修での専門科目のひとつである天文学の準備も兼ねて、ホーキング博士の *Briefer History of Time* (日本の教科書会社による編集版:「ホーキングが語る「宇宙のすべて」」 Stephen Hawking, Leonard Mlodinow 著、千葉康樹編註、松柏社) を採用し、2009年度は英国の簡略な通史を読む予定である (参加者の歴史学習不足を反省する声を受けたものでもある)。メールによる諸連絡や指導は、参加者選抜の11月から帰国後の10月くらいまで、およそ200通近くに及ぶ。参加者はかなり負担を感じているようだが、個人で正規留学することの極めて難しい各種世界ランキングで第2位か第3位に挙げられる大学へ研修に出掛ける上での最低限の礼儀であると言えよう。

世話教員としては、現地研修中に翌年の現地研修の日程をペンブローック側と詰め、直ちに旅行会社に1年先の航空券の手配を依頼し、11月には言語文化研究院とペンブローックカレッジの学術交流協定の翌年分の年次計画書を取り交わし、翌年1月には筆者が個人の資格で現地研修プログラムの契約書をペンブローックカレッジと締結する。

2. 3 現地研修

現地ではキャンパス内の寮に宿泊し、平日は英語科目と専門科目を受講する。英語科目は2名の講師が担当するが、2008年夏の場合は、ロンドン大学で英語教育を担当しペンブローックカレッジの専任も兼ねる方と、イタリアに留学中のケンブリッジ大学の優秀な大学院生が担当した。街頭インタビューとパワーポイントによるプレゼン、模擬裁判、時事問題の議論、学術論文の基礎、英国文化・歴史の学習、ニュース番組の制作など、実に盛りだくさんの内容である。専門科目は人文科学「芸術と建築」(ケンブリッジ大学で博士号を取得した元ケンブリッジ大学教員が担当)、社会科学

「英国と米国」（ケンブリッジ大学の大学院生が担当）、自然科学「天文学」（元グリニッジ天文台職員）のケンブリッジ大学天文学研究所員が担当）から1つ選択する。この他正装による晩餐会やTAによる連日の行事など、平日には盛りだくさんのプログラムが組まれる。

週末は事前研修時に学生自身の力で準備した週末旅行に出掛けることになる。自分で英国地誌の概要を勉強して訪問先の選定を行い、国内の旅行業者に頼らず仲間との調整をしながら直接手配を行う手作りの旅行なので、英語の訓練になるのはもちろん、合意形成の練習にもなり、また仲間意識の醸成にも一役買い、貴重な異文化体験となる。

2. 4 帰国後

9月に入ってすぐ帰国した後は、レポートを提出してもらい、必ず総括をきっちりしてもらおう。参加者部内で配布する記念冊子も作成する。また希望者には英語科目への単位認定（2単位）の手続きを行う。帰国後熱の冷めやらぬうちに後輩をリクルートしてもらおうが、2008年の場合、筆者が不定期的に出演しているラジオ番組（クロス FM「BBIQ モーニングビジネススクール」）にも3名ほど出演してもらい、研修のよさをアピールしてもらった。

3. TOEFL-ITP による効果測定

2007年12月から事前研修を始めて2008年8月に現地研修を行った第13回の参加者34名のうち、16名が帰国後の9月22日に九州大学内でTOEFL-ITP（本稿ではポストテストと称する）を受験した。これは研修の効果を知りたいという参加学生の熱意に押されて、筆者が責任者となって申し込んだものであり、九州大学生協が定期的実施しているものとは異なる。この16名のうち15名は2年生で、そのうちの14名は1年生だったときの2007年12月に、標準化テストとして1年生全員を対象に実施されたTOEFL-ITP（本稿ではプレテストと称する）をも受験している。7月とえば彼らの多くがこの研修への参加申込みをした時期でもあり、これら2つのテストのスコアを比較すれば、この研修に申し込んだ後の自己学習、事前研修、現地研修等の総合成果を測ることができるものと考えられる。各人の所属学部とスコアとその伸び等は表1のようにまとめることができる。

表1	文	教	法	法	経	経	理	理	医	工	工	工	工	農	
pre	479.7	470	477	503	513	467	487	513	447	483	453	443	477	500	483
post	496.0	473	507	517	513	483	500	477	463	517	520	457	517	500	500
伸び	16.3	3	30	14	0	16	13	-36	16	34	67	14	40	0	17

伸びの平均は16.3であり、大したものではないようにも見える。しかし513から477に下降した学生に聞いてみると、どうもポストテストでは体調が悪いままの受験だったようである。この学生を除いた13名で見た場合は表2のように、スコアが下降した学生は一人もおらず、伸びの平均は20.3となる。

表2	文	教	法	法	経	経	理	医	工	工	工	工	農	
pre	477.2	470	477	503	513	467	487	447	483	453	443	477	500	483
post	497.5	473	507	517	513	483	500	463	517	520	457	517	500	500
伸び	20.3	3	30	14	0	16	13	16	34	67	14	40	0	17

さらに、9月を待ちきれずに出国前の5月か6月に独自に受験した学生もおり、表3のようなスコアの伸びの報告を受けている。これも事前研修の成果と言えよう。

表3		工	農
pre	505.0	510	500
	541.5	530	553
伸び	36.5	20	53

また、帰国後 TOEFL でなく TOEIC を受験した者もいて、プレテストのスコアが500に対し、9月の TOEIC で805を取得した。これは、TOEFL, TOEIC を作成している ETS による換算式 ($TOEFL = 0.348 \times TOEIC + 296$: 現在の公式資料には含まれていない) にあてはめると、TOEFL の576にあたる。これらを総合して考えてみると、研修の参加学生がゆうに20以上スコアを伸ばしているということは言えそうである。

ここで問題になるのは、研修に参加しなかった同じ学年の他の学生がどういうスコアの推移を示すかということである。それらの学生たちよりも参加者のスコアの伸びが十分大きいということになって初めて、研修にスコア上昇の効果があると認めることができる。しかし残念ながら、研修の参加者ではない学生にポストテストの試験を受験してもらうことはできなかった。それは、研修の参加者でない学生に受験料を支払ってもらわなければならない、またその受験料を大学の予算から支出することは、大学の公式行事でない研修に間接的に資金を供給することになり、不適切であると考えられたからである。そこで、正確な比較にはならないことを承知で、他にデータを求めざるを得ない。調べてみると、九州大学と学生の英語力が似通っている大阪大学について、「初年度から習熟度別クラス編成を導入したある学部では、1年次春と2年次秋で実施された TOEFL-ITP のスコアの平均点が、11点ほど上がりました。」(TOEFL メールマガジン第41号 : 2008.10.27アクセス : http://www.cieej.or.jp/toefl/mailmagazine/mm41/user_report_itp.html) という記述があり、九大阪大クラスの1年生が「普通に」学生生活を送れば、スコアが伸びてもせいぜい1桁であろうということが想像できる。それを考えれば、確かに研修がプラスに作用したということは言えるであろう。

だが、「20以上のスコアの伸び」が、長期にわたる事前研修、高いコストのかかる現地研修に見合ったものかと言えば、それは微妙である。しかしながら、自らの成長を楽しみにして自発的に受験を集団で願い出てきたという事実の中に研修の成果が自明のものとして現れている。次の節以降では、スコアの上昇以上に、参加者の満足感が高く、進路決定にも好影響を与えているということを検証していく。

4. 参加者による評価

2008年夏の現地研修から帰国後、参加者から寄せられたレポートに見られる記述を類別し、それらから言えることを考察したい。

【事前研修について】

英語学習の計画を立てることで、自分に必要な学習を知り目標を持つことができました。／英国に関する発表は大変だったけれどやりがいがあった楽しかったです。／英語の勉強は絶対あきらめずにやるべきだ。そのためには研修前からモチベーションを高めておくべきである。／不安を和ら

げてくれたのは九大での英語の授業や事前研修でした。／事前研修があったおかげで現地での研修は何十倍も充実したものになりました。つらいことはありましたが、それがあってこそこの研修だと思えます。／8ヶ月の準備期間があったこともこの研修を選んだ理由である。／約8ヶ月の事前研修があったからこそ有意義な研修になった。／事前研修で、勉強時間が増えただけでなく、取り組み方が違いました。／ペンブロックに来ている他校の学生は明らかに準備不足でした。

つまるところ、肝心の現地研修の充実感は、事前研修で自分に負担をかけながら準備学習にいそしむ努力に大きく依存しているということであろう。長期にわたる事前学習の機会があることが、他の参加校の学生に比べてメリットであることを学生自身が自覚しており、参加者決定が早いことが利点として作用していると言える。努力の後にこそ本当の充足感を得られるということを身をもって知ることが、その後の人生にとって計り知れない影響を及ぼしているものと思われる。

一般論として、現地研修を成功させるための努力ということを理由に、一定期間の事前研修を組み合わせることで、海外英語研修には望ましい、という結論が得られるように思う。

【現地での英語体験について】

英語が国際語であることを心の底から実感しました。／アクセントが違うだけで本当に伝わらないという経験をして、もっと勉強しなくてはと心から感じました。／惨めだ、恥ずかしいと思うことでもっと勉強しなければという意識が芽生えました。／自分のリスニング力が温室育ちであることを強く思った。

これは異文化体験のうち、英語という言語の側面と言うことができよう。残念ながら筆者も、九州大学の学生一般を相手に、この研修のような充足感を得られる授業はできていない。やはり舞台が日本であるのと英語圏であるのは根本から異なると言わざるを得ない。

一般論として、学生が英語学習の指針を得るのに最も適しているのは異文化の文脈における英語体験であると言えよう。そしてそれに最も近い刺激を与えられるかどうかが日本国内での大学英语教育の評価軸の重要なひとつになると言えるであろう。

【現地での英語科目について】

授業はどれもオリジナリティに富み、よく考えられたものだった。／特にインパクトが強かったのは模擬裁判。／九大生に模擬裁判をやらせてそれなりの形にするのだから先生は凄腕である。／まとまったライティングの課題が出され、英語を書く力の向上に繋がった。／忘れてはならないのがニュース番組の作成である。／はじめの授業がフェア・トレードについて話し合う高度な内容で圧倒された。／準備に大忙し、発表前日はみんなP Cルームで徹夜という全力投球だった。／公園で全く面識のない人に英語でインタビューした。／アカデミックライティングの形式と使うべき表現を学んだ。／リーディングやライティングがかなり身についたと思う。今度のTOEFLが楽しみだ。／みんなよく話せて焦りを感じたが、同時にこれ以上のチャンスはないと思い返した。／プロジェクトの運営、チームのマネージメントなども学ぶことができた。／信じられないくらいに話が弾んだ。何も指示はされないのに英語の対話能力は格段に上がった気がする。／最終週の協同作業は研修最大の成果でした。ものすごい達成感がありました。

類似の授業を日本人教員が日本で実施してもなかなか学生は乗ってこない。日本国内ならネイティ

ブスピーカーによる授業でも大差ない。結局英語文化圏に舞台を移すということで初めて効果を持つという側面がある。そのお膳立ての中で精一杯立ち回る学生が感じる充足感の高さは想像に難くない。人間というのは悲しいもので、頭ではわかっても、大枚を費やして現地に行ってみなければやはり学習に対する覚悟のほどができてあがらない。

一般論としては、「現地での英語体験について」で得られた結論と同様のことが導き出せるであろう。

【現地人文科学科目「芸術と建築」について】

宿題はとても過酷だった。これが外国というものなのかと深く思い知らされた。／先生のレッスンの進め方のうまさ感動した。／歴史は好きでなかったが、この科目を通して歴史の資料を初めて楽しいと思った。

担当講師は、博物館の学芸員をたしなめる場面も見受けられるいわば美術の鬼とも言える存在で、全く教室を使わず、現場で教える実践的かつ本格的な内容である。海外の大学の授業のレベルの高さを思い知らされる内容である。

一般論として、正規留学までの力がまだない学生が相手だからと言って、そのレベルに迎合する授業ばかりでは、せつかくの現地研修の意味がないということが言えよう。

【現地社会科学科目「英国と米国」について】

扱う問題が難しく、読解は困難を極めた。／このレクチャーをもっと受けたかったです。

一般に九大生は時事問題、政治問題、歴史についてうとい。世界の問題を話題とするような授業にはついていきにくい。しかし、日本と英米の関係について日本人でない方から教えるのは新鮮であったろうと考えられる。

一般論として、世界標準の大学生としての知的常識というもののレベルの高さを感じてもらうことも現地研修を実施することの意義として含めたいものである。

【現地自然科学科目「天文学」について】

素晴らしい経験の一言に尽きると思う。／授業の準備をしっかりとくださって恐縮でした。／とにかく難しかった。しかし授業がわからず飽きるということではなかった。／先生の人間性に惹かれ、みんなも別れるのがつらかったようでした。

理系の学生ですら内容が高度だと口を揃えるのだが、日本人相手に手加減しないで内容の濃い授業をしてくださる講師には感謝している。また、英国のビジネスライクでない授業運営のあり方に、英国への正規留学を夢見る学生も増える結果となっている。

一般論として、現地研修を実施する国の大学の長所をしっかりと感得して帰って来られるようなプログラムにすべきであると思われる。

【TAについて】

何時間もかけて要点をまとめたスライドを作ってくれた。／TAを見て、もっと真摯に勉強しなければならぬと思いました。／彼らにはかなわないと思った。根本的な頭の良さを見せつけられ

た。／彼らと知り合うことができ、本当に幸せだったと思う。

TAはケンブリッジ大学の大学院生3名で、九大生の専属である。世界トップクラスの学生であり、九大生にとっては大学生かくあるべしといういい見本であったことだろう。また同じTAから複数年連続で御世話をいただくことが多く、人間の交流を大切にすべしという姿勢が見てとれる。

一般論として、現地研修では参加学生と年齢の近い優秀な学生をあててもらうことが望ましいということが言えるだろう。

【ケンブリッジ大学で】

建物の入口にホーキング先生の名前が書いてあり、感動しました。／街の中に大学がある感じで、アカデミックで、勉強する気になる雰囲気のある街でした。／心の底からケンブリッジ大学の学生を羨ましく思った。／あれだけ素晴らしいところで学べるなら学生もやる気がでるだろう。／近代文明の礎となった大学と思うと、身震いする思いだった。

その昔財力豊かな貴族が設立したカレッジが多いので、この真似を日本の国立大学ができないからと言って責めることはできないのだが、重厚な歴史的建造物の中で専属の料理人、専属の庭師、専属のパーテナーまでが活躍するうらやむべき手厚さの中では、確かに勉強しないことに対する罪悪感は募る。場の雰囲気という目に見えないものでケンブリッジ大学にはかなわぬものを感じる。

一般論として、現地研修は自校よりもレベルの高い、勉学の環境として優れたところを選ぶべきだということ言えるだろう。

【研修の仲間について】

みんなのモチベーションの高さを思い知らされた。／高い志を持った日本人たちと学び、かけがえのない日々であった。／研修で新たな仲間ができたのも一生の宝ものです。／クラス分けされ週末もばらばらなのに感じる一体感。気づかないうちにみんなで最高の研修を作り上げていたと思います。最高の仲間ができました。／強烈的な刺激を仲間から受けた。仲間であることを誇りに思える。／これほどまでに人とのつながりの大切さ、素晴らしさを感じることができたのは、間違いなく人生で初めてだと思います。

端的な英語力の養成だけの目的であれば、自分一人の環境で留学した方がうまくいくであろう。しかし長期の事前研修をともにし、現地研修で文字通り同じ釜の飯を食う仲間ができ、互いに自分の輝かしい将来の夢を語り、帰国後も大切な思い出を共有し、今後も互いを高めあっていく仲間がいることは、何物にもかえがたいことではないだろうか。

一般論として、自校から学生集団を連れていく形態を取るからには、その集団の存在自体を積極的に評価できるような運営の方法を取るべきであろう。

【今後について】

今までの人生を振り返ると同時に、自分が持っている夢への道を邁進する覚悟を決めることができました。／これからの勉強でこの研修の成果を出せるように頑張りたいと思う。／研修中にこれからの目標を見つけることができた。

英語の学習のみならず、学術に目覚め、今後の人生を考え、自らを高める決意をして欲しいと思う世話教員の願いが見事に達成されているようで、これほど喜ばしいことはない。「英語・学術研修」への改称にはそのような意図が込められている。

一般論として、現地研修の成果がその後の人生でも実感されるような内容が好ましく、そのためには端的な英語の訓練ということだけにとらわれない姿勢が必要だと思われる。

【自身の成長】

自分は本当に多くのことを学んだし、日々成長して常に自分を高めることができた。／この研修では、自分と向き合うための努力が必要となった。／たくさんのことを学んだと胸を張って言える。／英語だけでなく教養も足りなかったことを痛感した。／大学の講義に対する自分の姿勢が明らかに変わったと思います。／研修後単語を覚える速度が急速に上がりました。

自分が成長したという実感が得られるのは、日本でのみ学生生活を過ごした場合に比べて、投入する努力の量が根本的に異なるのであるから、当然のことであろうと思われる。努力しひとつステップを上がるからこそ、まだまだ自分を高めていく道のりが長いことを見てとる（無知の知）ことができるということであろうと考えられる。

一般論として、恐らく学部在学中に海外で学ぶ機会はあるものではなく、そうした貴重な機会として実施する海外語学研修では、端的な外国語能力の訓練に突き進み過ぎたものにせず、人生を考える余裕を与える部分がぜひ必要だと言える。

【世話教員へ】

これからも、後輩達のためにこの研修を続けていってくださることを願っています。

同様のコメントは多数寄せられており、筆者は九州大学に勤める限りこの研修を中止させるわけにはいかないという強い責任感を感じている。

一般論として、たいへん僭越ではあるのだが、やはり熱意を持って取り組む中心人物がこのような企画には不可欠だと言えらると思う。

【後輩へ】

必ず何かが身につく。そう思ったから最後の1週間は2回徹夜しても頑張れた。それくらいの思いを持って研修に臨んでほしい。／歴史を学んでおかないと後悔する。

こうした感想が寄せられることによって、事前研修における指導内容を毎年改めることができている。こうして研修の歴史を通じて、研修の出来映え・価値が年々改善されているように思われる。あたかも研修そのものが成長を続ける知的生物であるかのように感じる。

一般論として、年度をまたいだ参加者同士の交流の機会を持つことが望ましく、先輩達の思いを後輩へ反映させていくことが肝要と言える。

【研修全体の評価】

いくら書いてもこの研修の楽しさや素晴らしさを表現することはできない。／その1ヶ月間、僕は人生で最高の時を過ごした。／この研修は僕にとっての一生の宝ものです。／今までの人生の中で

一番充実していた日々だと断言できます。／研修を終えた今、不安を抱えながら右文先生の研究室に踏み込んだ一歩は、何万歩より価値のある一歩になったと自信をもって言うことができる。／この研修は私に生きていくヒントをたくさん教えてくれた。／先輩のお話からその素晴らしさは予想していたものの、その予想を遙かに超えるものであった。／今考えると、研修の充実感は苦しく逃げたいとの思いを乗り越えたからこそあるように思える。／言葉にして表現することのできないような大切なものを得たような気がします。／1ヶ月という短い時間だったとは思えないくらい内容の濃い日々でした。／準備期間の大変さもすべて帳消しになるほどの素晴らしい体験ができました。／これからきっと私の人生にずっと影響してくると思います。／とてもお金で価値をはかれるものではないと思います。／この機会を逃していたらもう一生経験できなかつたらろう。／本当にこの研修は自分の価値観を大きく変えるものとなった。／去年の先輩達が口を揃えて行けるものならまた行きたいと言った気持ちがよくわかる。／研修で得たものを劣化させたくない、その一心で張りのある生活ができています。

筆者は決して公刊物で「感動」を押しつけがましく書くことは好まないし、滅多にそのようなことはしていないつもりだが、毎年寄せられる「最高の宝物」「人生最良の経験」式の賛辞の嵐に、何とかその学生たちの思いを広く人々に伝えたいと考えている。この賛辞は九大生の素質と、ケンブリッジという器と、事前研修でかいてもらう汗の相互作用の結果であると考えられるので、現地研修の実施場所を変更するつもりは毛頭ないし、事前研修の世話に手を抜くという選択肢はあり得ないと思っている。この研修は今や筆者のライフワークである。

5. 参加者の進路

2008年夏に現地研修を修了した学生たちの中から、早速九州大学が持つ交換留学のプログラムに合格した者が出た（英国グラスゴー大学、豪州クイーンズランド大学等計3名）。過去の研修終了者の歴史をたどってみれば、米国ライス大学、英国ニューカッスル大学、英国ブリストル大学など、交換留学で名門校に行った者は多い。この他、米国MIT博士課程に正規院生として合格した者もいる。また、交換留学とまではいなくても、九州大学にやってくる留学生のためのチューターや日本語会話パートナーを務めたり、JTW（英語で実施する日本学習プログラム）の授業を聴講するなど、積極的に国際交流を継続する傾向にある。また、東京大学のロースクールへ進学したり、中央官庁や大企業に就職するなど、活躍の場を得ている。研修を通して海外への強烈な志向を持つようになり、もっと高みへと邁進する学生の姿を見れば、当然の結果であろう。

6. おわりに

ここでは導入節の内容を言い換えたり、本論の内容を要約したりする形式はやめて、言い訳を並べておく。筆者は英文法理論が専門分野だったはずなのに、なぜこの研修にエネルギーを割くのか。夏休みという勉強や執筆のいい機会をなぜこの研修のために譲るのか。なぜ多忙な授業期間に事前研修の諸業務を割り込ませるのか。それは、そこに教育における人間教師の介在の究極の姿を見るからである。志高い九大生を各学部から東ねて、その成長を見守る役目が、やりがいのないものであるはずがないのだ。本稿の内容をもってしても成果が十分確認できない、本稿が九大クラスの大学が実施する海外語学研修が備えるべき条件を導き出したと言えない、という議論があれば、残念だとしか言いようがない。